
サンフラワー

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンフラワー

【著者名】

春月桜

N48580

【あらすじ】

恋を知らない普通の中学生の冬月竜。いつも、支配できない女の子に・・・。

サンフランキー

1、紹介

俺は冬田 竜 『ふみつも つゅう』。中学生一年生だ。

身長は五七十三センチ。

やや高めの方です。

体重はちかちがはかったことがないのでわかりません。

でも、身長もあるんでわかんないんですけどねー。

この身長だと、普通の体重より重いと感ひただけど……。

まあ、とにかく。そのこと。

髪の毛はひつだけくせ毛がある。

顔は自由自在にあやつれる。

犬みたいにかわいい顔もできれば、かっこよさげな顔だつてできる。

みんなにはモテるはずだ。

男だって女だって、何でも出来る。

支配なんて簡単にできる。

でも、ただ、一人だけ、ちがうやつがいた。

高杉 向日葵 『たかすぎ ひまわり』といつ女は俺に全然興味をもたない。

何故だつて？ それはこつちが聞きたいね。

俺はあいつ、高杉が俺にふりむくよつにいつも、話しかけてるんだけど、いつも、余計なやつらに邪魔されてしまつ。

その高杉つていうやつは真面目なわけでもない、みんなは嫌いじゃないといつ評判だ。

でも、何故か俺にだけちがよらない。

なんでかな。まさか、あいつ俺のこと…。んなわけないか。

いつもの登校する道。いつもとかわらない。はずだつた。今日は…。

2、今日はなんでこんなこと起きるんだろ？…

今日もかわらない一日だと思つてた。

「おひはよー！。」

俺は元気よく挨拶をしながら教室に入った。

『おはようーーー。』

高い音程と低い音程が合わさうながら俺のほうにむかってきた。

ただ、それに、一人だけ俺に挨拶をしていなこやつがいる。

そう、高杉だ。

俺の席のななめ前の席に座つてゐる高杉に俺は挨拶をした。

「おはよ。」

俺はやせこく声をかけた。

「…。」

高杉はあまり浮かない顔でじつと俺を見てきた。

俺は一コラとじて自分の席についた。

多分高杉も俺を意識してはじめてみるとだけだ。

(次はちょっと盗み聞きしてみようかな?)

キーンゴーンカーンゴーン…

お休み…

俺は高杉達をつけてみた。

「ねえ、ねえ、竜君つてよくない？」

一人の女の子が言った。

（お、あの子俺のこと好きなんだ・・つてそいつちじやなかつた。）

「あ、私もそう思つた。なんか、犬っぽくつてかわいいよね。」

もう一人の子も言った。

（ふーん。やつぱり、女つてちょろいな。）

「どうがよ。」

俺は苦笑つとした。

高杉は弁当を開きながら言った。

俺はつばをゴクンっとのんだ。

「えー、何で？ いいじやん。犬みたいでかわいがりたくなつち
やつじやん。」

女の子はすく笑顔で言った。

（やつだそつだ。）

俺はつなずきながら自分で勝手に実感していた。

「私はその犬つかぶりしてるのがいやなの…。」

高杉はちよつとだけつむきながら言った。

『え?』

女の子みんなが首をかしげた。

「だつて、みんなにやせしょくじるといふがいや、犬の仮面をかぶつてないとみんなの友達とかになれないって自分の本来のことをだしてないんだよ? 私は本当の冬月がしりたい。」

高杉は悲しげな目をして言った。

(そんなこと考えてたなんて)

俺は思わず頭を抱え込んでしまった。

俺はもうこじやと思い、教室にもどった。

俺は廊下で考えていた。

(でも、本当の俺つて何だつて、どんなだつたつて。さすいてたらこんなふうだからな…

つてゆうかなんで高杉のことで悩んでんだ?)

そつか……俺・・高杉の「こと……好きなんだ……？

「あはは、なんでだるい。反則だる。」んなの。」

3、やつとかこたんだだから・・・・!

キーンコーンカーンコーン・・・

終わりのチャイムがなつた。

俺は、ななめ前の席にむかつた。

そして、その席に座つて帰りの準備をしてこゑあひおまてひまつて思つたの!..

「竜君一緒に帰ろう?」

俺を女の子達が呼び止めてきた。

「え? あ、うん。」

俺は今日まあきじめた。

チラシ

俺のことを高杉が見てきた。

ドキンッ

俺は固まってしまった。

ブイッ

高杉はまた、前をむいた。

ホツ

俺はちょっとだけ、ほつとした。

「ねえ、帰つてくれる?」

女の子のもう一人が聞いてきた。

「あ、うん……」

『やつたー!』

俺は返事してしまった。

女の子達は喜んだ。

(ヤベツ。)

俺は口がなれてしまつてしまつてしまつた。

『やつたー!』

みんなでそろそろと帰っていく。

部活がある子は部活に向かう。

帰宅部のやつらは帰っていく。

高杉は陸上部だ。

俺は帰宅部。

高杉は体操着で走っていた。

高杉は短距離中学短距離走で優勝した。

だから、陸上部（短距離）のリーダー。

欠かせない存在なんだよ。

だけど俺は…。

「ごめん、やつぱり今田一緒に帰れないや。」や。

俺は約束してしまった子達を先に帰らせた。

教室で、まつことにしてた。

高杉を…。

十分後…

俺は本を読んでいた。

ガラツ

「何でいるのよ。最悪。

高杉はいやそうに言った。

一
わ
り
し
か
よ
」

俺は言いつつ何もないことを隠すためありきたりな言葉を放つた。

「何でいるの？」
「で？」

高杉はあきれた顔で言つてきた。

「それは……」

俺は「こも軽く言え」のに一緒に帰るって言えたのに

尙故か高橋は言ひとては重く感じた

高木は黙ってたみたいで

「先帰つてもらつた」

「何で！？」

高杉はびっくりした顔で俺に聞いてきた。

「一緒に・・・一緒に帰るために。」

俺は顔を真っ赤にしながら思い切って言った。

「誰と?」

高杉は首をかしげて言った。

「お前と・・・高杉と。」

俺はすく顔が熱くなつた。

俺は生まれて初めて恋といつものをした。

「ふーん。」「めん・・・

「え?...」

「つい言つたら?..」

高杉はクスクス笑つて言った。

「てめー人をからかいやがつて。」

俺は怒りでいっぱいになつた。でも…

「いいよ、一緒に帰つても。」

高杉は俺のまつをふりむいて、今までにない笑顔で言つてくれた。

俺は顔が明るくなつた。

「じゃあ、教えてあげる。」

高杉が笑つて言つた。

「私だけの秘密の場所・・・」

俺はきたことのない道を歩いて、きたことのない場所にきた。

ただ、これだけはわかる。

「のきたことのない道を俺は一日で覚えた。

「すつづーーー。」

俺は「」の言葉だけしか頭につかばないぐらこそ「」に迫力にであつた。

「す」こでしょ。あれいでしょ？ いつも、落ち込んだりしてると
あははこきたりするの。「」の頃につぱにきてる。毎日・・・誰かの
せいだ。」

高杉は俺のまつを見てきた。

「俺、やつときすこたんだ。」

「え？ 何が？」

「お前のこと・・・高杉のことが好きなんだってこと。」

俺はついに言ってしまった。

「……私も、実は好きだったの。でも、本当のあなたが見たくてずっと黙つてたんだ。」

高杉は泣きそうな顔になつていた。

「俺はお前が好きだから。」

俺はなれてない手で高杉の顔を俺にむかせ、そつと、キスをした。

「私も大好きだよ。」

俺はこれから起らせるいやなことをしるよもなかつた。

4、せっかく、画思いになれたのに・・・

翌日、

「おひはよー！」

俺はいつもより元気な声で教室にいるみんなに挨拶した。

『おひはよーーー。』

みんなは言い返してくれた。

「あれ？ 今日高杉いないの？」

俺は首をかしげて言った。

「うん、休みみたい。」

女の子達は心配そうな顔をして囁ひ始めた。

俺はちよつと心配になつた。

ガラツ

先生が教室に入つてきて話し始めた。

「みんな、座つてくれ。」

深刻な顔をして先生がみんなに呼びかけた。

「実はな、高杉のことをいろいろはなしがあるんだ。」

先生はみんなから顔をそらしていた。

「高杉は車にぶつかって、記憶喪失になつた・・・」

先生は少しつらがりながらして言った。

「先生それって、俺らのことは忘れてるってことですか？」

一人の男の子が言った。

「いや、中学一年のこと忘れているから、あと分、中学一年から一緒にだったら覚えているはずだ。」

先生はうつむきながら言った。

「じゃあ、私のことは覚えてるわ。」

女の子が一人立った。

「俺も、中一のとき陸上部だった。」

男の子も立ちはじめた。

（俺は覚えてねえな。初めてだもんな。）

俺はそう考えた。

（病院に行つてみよう。）

キーンゴーンカーンゴーン……

お昼休み……

「先生、高杉のいる病院教えてくださいー。」

俺は職員室に戻るとこの先生を呼びかけて言った。

「ああ、いいけど。」

先生は微妙な顔をして教えてくれた。

キーングーンカーンゴーン

終わりのチャイム……

俺はあわてて帰りの準備をして、あわてて走って病院に向かった。

その時、考えた。

昨日のことを話せば記憶が戻るはず。

きつともビーム。

そう・・・考えるしかできない。

信じじることしか俺にはできない。

病院についた。

ガ一

病院の自動ドアが開いた。

俺は受付に走った。

「すみません、高杉さんの病室は何処ですか？」

俺は少し、息を切らしながら聞いた。

「え、六〇七病室ですけど。」

看護士さんがちょっとびっくりした顔で教えてくれた。

「ありがとうございます。」

俺は早歩きで病室にむかった。

そこまで、大きくなかったから迷いはしまかったけど。

俺は病室のドアの前で深呼吸を二回ぐらいして、入った。

ガラッ

「失礼します。」

俺は声をでかめだけおさえて入った。

「はい、どなたでしょう？」

高杉は元気な顔で言った。

（よかつた元気をつで。）

「俺、冬月 竜っていうんだ。高杉とはクラスメイトだったんだ。」

俺は、笑顔で言った。

「すいません、あなたのこと覚えてない。」

高杉はちよつとうつむいた。

「思ひ出せるかもしれないよ?」

俺は高杉の顔をのぞきこんだ。

「え? 本当に?」

高杉は目を光らせて言った。

「うん、思ひ出せるがもしれない。その思い出す鍵は外にあるんだ。
いける?」

俺は高杉に聞いてみた。

「うん、いける。」

そして、俺達は外に行つた。

「I'mは、私だけの秘密の場所、何であなたがしつてるの?..」

高杉は信じられない敵な目をして俺に聞いてきた。

「昨日、俺に教えてくれたんだよ。高杉が。」

俺は遠くを見るような目だった。

「私が教えたの？」

高杉はびっくりしていた。

「ああ、昨日。」

俺は、思い出してくれつとずっと願った。

心の中で。。。

「う、痛い。」

高杉はいきなり、頭を抱え込んでしゃがんだ。

「だ、大丈夫が？！」

バタツ

いきなり高杉は倒れた。

「高杉！……。高杉？……高杉——……」

俺はいそいで、病院にはこんだ。

「一応、落ち着きましたね。」

先生（病院の）が笑みをこぼして言つてくれた。

「はあー、よかつた。」

俺は力が一気になくなつたようにへナへナーツヒシヤがみこんでしまつた。

「すみません！ 高杉の母です！！ 娘は！！ 娘は大丈夫なんですか？！？」

高杉のお母さんがやつてきた。

「大丈夫ですよ。高杉さん。」

先生は優しく声をかけた。

「よかつた。ひつく、ひつく。」

高杉のお母さんはしゃがみこんだ。

「ちよつと、お母様にお話がありまして、高杉さんのこと……」

先生は深刻な顔をして、高杉のお母さんに声をかけた。

「はい、なんでしょう？。」

「ううじやなんなん……」つちく。

先生はほかのところのつれていつた。

俺はその後をおつた。

先生は会議室みたいなところの椅子に座った。

「どうぞ。」

先生は高杉の父母を座らせた。

「実は、あることがわかつたんです。」

先生は真剣な顔をして離し始めた。

「高杉さんはうつたのと同時に忘れたかつたことがあつたみたいで、それを忘れないと思っていていたのでしょう、だから、記憶喪失になつたのでしょう、中学一年から忘れたのは、中学一年になつて、忘れないことがあつたのでしょう。」

先生はまづむこきながら言つた。

「わづですか……」

高杉のお母さんほぐるしそうな声をしていた。

（うそだろ？　じゃあ、俺のこともクラスのやつらも、みんな忘れたかったのかよ。）

ガンツ

俺は思いつき壁に殴つた。

「何でだよ？」

ギリツ

俺は歯をかみ締めた、痛くなるまで赤くなるまで、泣いて…

翌日…

俺は病院に行つた。

六・七病室に入つた。

ガラツ

俺は浮かない顔で、入つた。

「失礼します。」

俺は何もはなせない。

「どうしたの？今日は元気ないね。冬月 竜君。」

俺はびっくりした。

だつて、あの、記憶喪失だつた、高杉が俺の名前を呼んでいるんだから。

「うそだろ？」

「何がよ？」

「だつて、お前、記憶喪失・・・」

俺が言いかけたときに高杉が・・・

「わうよ、記憶喪失だつたよ。だけど、思い出したの、冬月があそ
こにつれてつてくれたからかな?」

高杉は今までにない優しい笑顔で言つてくれた。

俺は抱きしめた、くるじくなるほど、いたくなるほど。

強く強く抱きしめた。

高杉のことを。

「また、一緒にいこうな、向田葵畑に・・・」

「うん。」

俺達だけの場所。

あの、綺麗に向田葵が咲くといい。

大好きな君が大好きな

所。

ゆいいつ一緒にいれる所。

俺達が

大好きだよ・・・向日葵・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4858c/>

サンフラワー

2010年12月9日03時28分発行